

人は生きている限り、様々な試練にぶつかります。人生試練の連続ではないでしょうか。私たち、キリスト者もそうです。今朝、パウロは私たちキリスト者の試練をイスラエルの歴史、特に出エジプトの出来事を通して教えています。ですから、読む時、あらかじめモーセのエジプトからの脱出の出来事を知らないで、読んでいても良く分からないのです。ここでは、パウロのみ言葉を学びながら、解説を加えてお話ししたいと思います。

1節に「わたしたちの先祖は皆」、と書いています。この、わたしたちはコリントの信徒の人々のみならず、日本人のキリスト者全員が含まれているのです。と申しますのも、キリスト者は旧約時代のイスラエルの残された民なのです。キリスト者は旧約聖書の古い枝に接ぎ木された新しい枝だからです。古い枝とは旧約聖書の信仰をさしますが、キリスト者の信仰は旧約聖書を土台としてるからです。ですから旧約聖書を読まないでパウロや他の使徒たちの信仰も良く分からなくなるのです。パウロは、モーセがエジプトを脱出した出来事を、それはイスラエル人であれば、誰でもが知っていること、栄光の脱出を例にとりコリントの教会の信徒たちに教えています。しかし、コリントの教会のクリスチャンたちは異邦人もいたので、皆にわかりやすく教えています。パウロは言います。「わたしたちの先祖は皆、雲の下におり、皆、海を通り抜け」とは一体何のことだろう、と異邦人は不思議に思うでしょう。2節「皆、雲の中、海の中で、モーセに属するものとなる洗礼（バプテスマ）を授けられ」とは一体何なのだろう、と不思議がるでしょう。「パウロ先生は面白いことを言っているなあ」と思うでしょう。この出来事はイスラエル人の信仰告白なのです。そのところを学んでみたいと思います。旧約聖書に「出エジプト記」というところがあります。そこに詳しく書かれているのでかいつまんでさらってみます。イスラエル人がエジプトに住んでいた時、彼らは奴隷として働きました。過酷な毎日でした。イスラエル人は耐えていたけれども限界にきて、同じイスラエル人の有能な人モーセに頼みました。それは BC 紀元前1200年から1300年くらい前の出来事でした。そこで、モーセは神から示された“乳と蜜の流れる地カナンに”移住したいと再三パロに願ったけれど、時の王であるエジプトの王は拒否したのです。安価な労働力がなくなるからでした。しかし、神は数々の奇跡を与えてイスラエル人をエジプトから脱出させたのでした。エジプトを出てそれから40年、イスラエル人たちは水も乏しく、食べ物もない荒れ野に天幕の生活を余儀なくすることになったのです。人間的に考えれば、そこでイスラエル民族は滅亡する道を進んでしまったでしょう。ところが、恵の神は守りました。先祖ヤコブに与えられた約束は今も続きました。「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行ってもわたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない」（創 28:15）と神はヤコブに約束したことを、ヤコブのずっと後の子孫が受け継いだのです。その土地はカナンでし

た。私たちの先祖というのはヤコブの子孫のモーセに導かれたイスラエルの民族のことです。カナンに至るまでの道のりは過酷な旅でした。砂漠なので太陽が容赦なく照りつけます。でも神は天から雲を造られ守られました。出エジプト記にこのようにあります。「主は彼らに先立って進み、昼は雲の柱をもって導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた」(出エジ 13:21) このところを映画で見るとよくわかります。「十戒」1956年版です。モーセ役はチャールストン・ヘストンです。その映画を見ると目のあたりに波がかぶさってくるような思いがしてハラハラしながら見ました。想像で聖書を読むより臨場感があります。聖書の巻末に2 出エジプトの道という地図があります。ここをご覧になると良く分かるのです。北に葦の海があります。イスラエル人はラメセスを出発してゴシェンに下り、また北上してバアル・ツエフォンにきました。1節に「海を通り抜け」とありますが、このところ、後ろにエジプト軍が追いかけて来て、あわや捕まる寸前に雲が湧き上がり前方が見えなくなるのです。その間、イスラエル人は海を渡るのですが、海が分かれて道が出来て、その道を急いで渡って、向こう岸に全員がたどり着いた時、海が戻ったのでエジプト軍は溺れて全滅するのです。そのことを、海を通り抜けてとパウロは表現しているのです。モーセ率いるイスラエル人の脱出物語は神の救いの御業として代々受け継がれ、今もユダヤ人は年1回故郷のイスラエルに里帰りして過越しの祭りパスオーバーを祝うのです。この過越しの祭りとは、神が過越されるという意味です。エジプトでパロがなかなかイスラエル人を脱出させることはせず頑なであったので、神は最後の災いを下します。それが主の過越でした。モーセは言います。「さあ、家族ごとに羊を取り、過越の犠牲を屠りなさい。そして、一束のヒソブを取り、鉢の中の血に浸し、鴨居と入り口の二本の柱に鉢の中の血を塗りなさい。翌朝まで誰も家の入口から出てはならない。主がエジプト人を撃つために巡るとき、鴨居と二本の柱に塗られた血をご覧になって、その入り口を過ぎ越される。滅ぼす者が家に入って、あなたたちを撃つことがないためである」(出エジ 12:21~23) とあります。その晩、主の過越が起こり、エジプト人の初子は死んだのでした。結局パロは「さあ、わたしの民の中から出ていくがよい」と言ってイスラエル人を出国させたのでした。その時、エジプト人は民をせきたてて急いで国から去らせようしました。民はまだ酵母の入っていないパンの練粉をこね鉢ごと外套に包み肩に担いで出たのです。この奇跡を毎年ユダヤ人は思い出し過越祭を祝って家族で神の大いなる恵みに感謝し信仰告白としてずっと守ってきたのでした。今もユダヤ人が多く住んでいるニューヨークのレストランには、マッツオボールなる物が無料で食べられるそうです。ある CD を聞いていたらそういう会話があったのです。実際私が行ったわけではないので。マッツオとは小麦と水を練って醗酵させないでせんべいのようなものではないのでしょうか。それをマッツオボールというらしいのです。ユダヤ人は、マッツオボールを食べて神の大いなる恵みをかみしめたのでした。そして、今に至るまで約3000年~4000年もの長い間、受け継がれてきたことはユダヤ人の信仰の凄さを思わせられます。イスラエル人は命からがら向こう岸にたどり着き、それから40年の間砂漠の民として鍛えられていくのです。パウロは先祖

の偉大な出来事、神の大いなる御業を振り返り、コリントのクリスチャンの信仰と重ね合わせます。この40年間の砂漠での生活は実に、イスラエル人の良き訓練の場となりました。エジプトを出発した時、壮年はカナンに入る前に死に至ったかもしれません。二世代の者は成長し子供をもうけたでしょう。その様に世代交代が行われ砂漠の民として適合する体に造り替えられました。「海の中で、モーセに属する者となる洗礼を授けられ」とありますがこれはどのような意味でしょうか。パウロは丁度コリントの人々が洗礼（バプテスマ）によってイエス・キリストと結ばれるように、神の不思議な摂理と恵み、奇跡の救いを通して民はモーセに固く結ばれ洗礼（バプテスマ）を授けられたと考えたのです。砂漠の民はどのようにして水を得たのでしょうか。民がエリムという場所につくと、そこには12の泉があり、70本のナツメヤシが繁っていたのです。ナツメヤシの実には淡白な味の水のような甘いジュースで満ちています。人々は泉の水を飲んだりヤシの実を飲んだりして渴きを潤したのでしょうか。日本でも山岳地帯には岩清水が湧き出ているようで、よく水筒に入れて持ち帰る人もおられるようです。あちらの荒れ野でも紅海に沿っているので、低い木・灌木が生い茂っていたかもしれないので地下水が通っていて岩清水の現象があったかもしれません。パウロはこの岩こそ救いの水だからキリストだったと教えるのです。

5節から12節はイスラエルの人々の墮落の歴史です。イスラエルの民は疲れてしまったのです。やみくもにモーセに従ってきたけれども、足も腰も痛くなってきたし、おいしい食べ物はないし娯楽もないし、一体あとどのくらいでカナンにつくのだろうか。いや、本当につくのだろうか、神の言われる「乳と蜜の流れる地」にたどり着くのだろうか、疑心暗鬼になったのでした。5節「しかし、彼らの大部分は神の御心に適わず、荒れ野で滅ぼされてしまいました」とあります。せっかく来たのに、あの嫌なエジプトから出られたのに、いまはもうぶつぶつ言っています。でも分かるような気がします。人間だから。モーセがシナイ山に登り、「十戒」を受けて下山すると、民は勝手に「金の子牛」を作り拝んでいたのです。モーセは怒って金の子牛を火で溶かし水にまき散らしたのです。その日、モーセによって罰せられた者は23000人でした。民は偶像礼拝で、不品行で、主を試みる、つぶやきのため滅ぼされたのです。この4つは現代でも生きているのです。偶像はものだけではなく、例えばお金の亡者（もうじゃ）、学歴の亡者、権威身分に固執する亡者その他いろいろあります。その方が怖いのではないかしらとも思います。そのような亡者になると皆に迷惑をかけるので困ります。主を試みるとは、主と対等になることです。その人たちは蛇にかまれて滅びました。不品行は偶像礼拝とつきものなのです。どういう訳なのでしょう。そして、不平を言って滅ぼされました。そして、13節は希望です。「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」ここは嬉しい御言葉です。この御言葉に勇気を与えられた人も多いいでしょう。「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです」と言い切っています。パウロの人生も波瀾万丈の人生では

あったけれど、きっと、耐えられないような試練を受けたことがなかったのでしょう。いつでも助け手が現れたと思います。

「逃れの道」とはどのような道でしょうか。一つは試練を早く終わらせてもらうこと。二つ目は誘惑に誘われる魅力をあまり感じなくなる心の変化。三つ目は試練を負いきれる力が付くこと。四つ目は、試練これは迫害とも考えられますが、これによって死んで苦痛をまぬがれること。最後はこの世の終わり、終末が到来すること。このようなものが考えられると思うのです。人によってはまだあるかも知れません。サタンは私たちに倒そうとするけれど、神はそれに耐えられるように私たちをしてくださるのです。何故なら、神は真実な方だからです。この一年も、わたしたちも、真実な神を仰ぎ見て共に歩みたいと思います。